

十一月下旬、長姉も次姉に続いて世を去った。深谷市の歯科医に嫁ぎ、幸せな生涯だったと思う。主人は深谷市の名誉市民になった程の好人物。長く小生もお世話になった方であった。

さて、十二月中旬には久しぶりに社の催している佐美雄賞と出版賞のイベントを予定している。

・見渡せば定家の詠みし秋ならん物侘しらに咲く貴船菊 角 広子

・硝子窓あかねに染めて射す入り日どこか遠くへ行きたい夕べ

・滑舌の悪い夫とする会話ちんぷんかんぷん笑いの絶えぬ

いつも優れた歌を詠まれる作者。定家の名歌を初句に用いているが、四句の「侘しらに」の表現はともユニーク。植物オウチの小生、結句の菊は特殊な尊い菊であるうか。

二首目の四句五句は歌謡曲でよく耳にするのでどうかと思いつながら、本歌取りの作としてやはり印象に残る。

三首目、滑舌という熟語を使う方はとても珍しい。ふつうは会話とか話し方の表現

になろうが、かつぜつという熟語を使用している方はとても稀だろう。リアルな熟語を使いこなせる作者だと感心。

・ニコタマの花火見てから帰るとお願い叶えり十月五日 片山 紫

・この夏は病院で避暑をしましたと不届き顔で花火見ている

曾て長く成城や下北沢でカルチャアの講師をした小生のチーフ役の方。小生も八十路となったが、作者は九十歳を越えられたという。もともと実力のある作者。しばらくお会いしないが、ご健勝を切に念じている。そう、会には塩川郁子さん、大岩洋子さん、さらに伊吹元文部大臣の奥さんもおられた。

・水平に剣を構える姿なり霜月の朝まつ暁のあさがお 堀 亜紀

時代劇好きの小生、明け方の朝顔に殺氣を感じた。

今日の歌

谷岡亜紀

特選の永田千奈作。解体されゆく団地を

連作として歌い、都市のひとつの物語が生まれた。北久保まりこ作。宇宙や宗教といった極大のものと、ごくひそかな気配、感覚とを対比する。児島昌恵作。都市の中の自然の「サンクチュアリ」を歌う。梶山都作。こちらら身近な自然界にごく秘かなシグナルを読み取る。以下、特選以外の注目作を誌面の許す限り挙げる。

・生きたとはあまりにうつくしき地獄その鋒でラストダンスを 山下 眞美

・薄の穂やうやく乾き戻らない傾きに載せる午後の笑止を 生野由美子

・秋の日をただ浪費して縁に居り彼岸と此岸往き来してゐる 鈴木 洋子

・耳鳴りに頭痛止まざり死を孕み夜に顕なりカンナの大きな葉 祖母井美香

・卵焼きひとときれ食みて終はりたりみじかき秋のみじかき昼餉 山田 幸子

・ただひとり遠に火をみる男の背 伴大納言は罪を得たるも 長野 淑子

・降りしきる絶叫。ジェットコースター越しに真白き雲居を仰ぐ 佐藤 博之

・雨やみて六階の癌病棟へ軽々と飛びゆく一羽あり 木村よし子